

シンポジウム報告編

コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム

開催日時: 2001年7月22日(日) 13:00 ~ 16:30

開催場所: 横浜市スポーツ医・科学センター大研修室(横浜市・港北区)

パネリスト:

長岡 茂(JAWOC茨城支部)

竹原 典子(横浜・茨城会場ボランティア参加者)

小島 裕範(Alliance2002 代表)

司会進行: 中塚 義実(サロン 2002 代表)

主 催: サロン 2002

後 援: Alliance2002、NPO法人日本サポーター協会、ソシオ・フリエスタ

運 営: サロン 2002 ワールドカップ プロジェクト1

目 次

ごあいさつ

コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム開催にあたって
中塚 義実(サロン2002 代表)

第1部 プレゼンテーション

プレゼンテーション1 /

運営側から見たコンフェデレーションズカップの成果と課題
長岡 茂(JAWOC茨城支部)

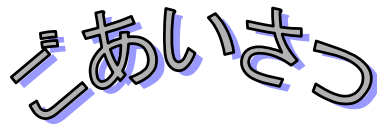
プレゼンテーション2 /

ボランティアから見たコンフェデレーションズカップの成果と課題
竹原 典子(横浜・茨城会場ボランティア参加者)

プレゼンテーション3 /

市民団体から見たコンフェデレーションズカップの成果と課題
小島 裕範(Alliance2002 新潟代表)

第2部 ディスカッション



コンフェデレーションズカップ総括シンポジウム開催にあたって

中塚 義実 サロン 2002 代表

サッカーを愛する皆さん、こんにちは！

市民レベルでのコンフェデ杯の総括を

サロン 2002 代表の中塚です。主催団体を代表してご挨拶、ならびにサロン 2002 の紹介をさせていただきます。

いよいよワールドカップ開催まで1年を切りました。というより、来年の今ごろ(7月)はすでにワールドカップが終わっていて、それぞれの胸の中に、ワールドカップの思い出がたくさんつまっていることでしょう。良い思い出を作り、良い財産を残せるよう、現在各地で準備をしております。

先日開催されたコンフェデレーションズカップ(コンフェデ杯)も、ワールドカップのプレ大会の一つとして位置づけられていました。そこで、この大会の総括を市民レベルで行っておく必要があるのではないかということで、今回のシンポジウム開催となりました。

サロン 2002 の発足から今日まで

シンポジウムに入る前に、まず主催団体のサロン 2002 について簡単にご紹介します。この組織は、もともと日本サッカー協会科学研究委員会の中で、社会学、心理学に興味を持つ人たちの研究グループ、「社心グループ」をルーツとしております。1980 年代後半から活動していたのですが、当時は研究者だけの、少人数の集まりでした。ところが、93 年の Jリーグ発足、ワールドカップ招致活動と 2002 年大会の共催決定など、サッカーを取り巻く環境の劇的な変化の中で、選手、指導者、研究者だけでなく、さまざまな人たちがサッカーに関わるようになり、「社心グループ」の参加者も多様化し、規模も拡大していきました。この状況を受けて、97 年度からは、名称を「サロン 2002」と改め、多様な人々の情報交換の場として再出発しました。

主たる活動である毎月 1 回の例会は、すでに 55 回を数

えています。ちなみに今回のシンポジウムも、サロンとしては第 56 回の「お出かけサロン」と位置づけています。次回は「出張サロン」として、静岡県の清水市に出かける予定です。月例会の内容は、毎回ホームページ<<http://salon2002.net>>で公開しています。「情報」と「人材」のネットワークがサロン 2002 の財産なのです。

ゆるやかなネットワークとプロジェクトの両立へ

「来る者拒まず」の姿勢で、ネットワークはどんどん広がりました。インターネットや電子メールの普及も影響しています。しかし逆に、広く薄くなりすぎて、組織としての方向性を見出しにくいという問題も出てきました。そこで組織のあり方を見直し、2000 年度からは、“志”に賛同し、かつ“give and take”の関係をサロン 2002 と結ぶ人をメンバーとする会員制の組織として再スタートすることとなりました。それ以降、ゆるやかな全体的ネットワークであるサロン 2002 の中で、あるテーマについて何らかの結論を出して具体的な行動を起こす場合はプロジェクトを組織して取り組むことになりました。

「ワールドカップ・プロジェクト 1 (ワン)」はこうして立ち上がったプロジェクトの一つで、今日のシンポジウムは、このプロジェクトの活動として開催されました。

本シンポジウムの概要

コンフェデ杯を開催した茨城、新潟、横浜の各都市で、運営側として、ボランティアとして、市民団体として関わった方々の情報を出し合って、次のステップに向けて総括しようというのが、今回のシンポジウムの目的です。そして、シンポジウムの報告書を作成し、コンフェデ杯を開催していない他の自治体や市民団体などの関係諸団体にお送りし、今回の総括の成果を共有したいと思っています。

シンポジウムの開催にあたっては、志を同じくする他の団体にもサポートしていただきました。後援いただいたのは、Alliance2002、日本サポーター協会 (J S A)、ソシオ・フリエスタです。また、運営にあたっては、横浜国際ボランティアスタッフなどの方々にもご協力いただきました。ご紹介を兼ねて、お礼申し上げます。

こうした多くの方々のご協力のもとに、シンポジウムが開催できたことを大変うれしく思いますし、会場にいらした皆様に心から感謝いたします。

第1部 プレゼンテーション

プレゼンテーション1

運営側から見たコンフェデレーションズカップの成果と課題

長岡 茂 JAWOC茨城支部

JAWOC茨城支部で競技運営を担当している長岡です。運営する側としては、ボランティアとして参加していただかない限り、なかなか皆さんと意見を交換する場がないので、この機会を通じて、ワールドカップに向けてどのようなご意見をお持ちなのかを伺わせていただき、より良い運営にするための材料にしたいと考えております。

今日は、運営側から見た成果と課題について報告させていただきますが、横浜、新潟、茨城3会場で開催された大会のうち、私が直接体験した茨城大会での経験を中心に述べさせていただきますと思います。

1 / 大会を終えた成果

1 貴重な経験をさせてもらった

何はさておき、貴重な体験をさせてもらったことが、第一の成果です。今回、1日おきに3試合を運営できたことは、タイトなスケジュールではありましたが、ワールドカップに向けての良い経験になりました。カシマスタジアムでも来年のワールドカップでは、6月2日、5日、8日と3試合が予定されており、本番に近いかたちでシミュレーションできたのはまぎれもなく貴重な経験でした。

ワールドカップについては、予選の結果、12月1日に行われるグループリーグの抽選会が終わってからも、現実的な準備のスタートだろうと思っています。どの国のチームが来るかによって、具体的な対応も違ってきますので。現在は、まだどのチームが来ても対応できるような大まかな骨格づくりを進めている段階です。

コンフェデ杯も開催決定から実際の開催まで準備期間が短かったので、本番のワールドカップも実質6ヶ月ということでは同じようなものになるでしょう。

2 コンフェデ杯とワールドカップの違い

コンフェデ杯は準備期間が短かった割には、ある程度の成果が得られたのではないかと考えております。ただ運営側としての満足感・充実感は得られたものの、ワールドカップの成功が約束されたわけではないので、もう一度両大会の違いについて認識しておくことが大事だと思います。

その意味でも、いきなり本番としてのワールドカップではなく、規模は小さいながらコンフェデ杯を体験できたことは気持ちの余裕につながっています。もちろん規模が圧倒的に違いますから、いろいろなリクエストが出てくるとは思いますが、それでもまったく白紙の状態でリクエストを出されるよりは、気持ちの上でもゆとりを持って取り組むことができると思います。

コンフェデ杯については大半の観客が日本人という意味で、運営する側にとって、うまくいって当たり前という部分はまちがいにあったでしょう。

来年のワールドカップではご存知のように、チケットが海外でもかなりの数が販売され、外国人が大量に訪れることが予想されるので、受け入れる側の運営スタイルも、当然コンフェデ杯とは違うものになることは認識しております。

3 チームの特色を体感できた

茨城に関しては、予選リーグの4チームが全部訪れたので、それぞれのチームの特色を体感できました。ブラジルのように、チームの練習時には、2時間前に用具係が会場に来て、選手のユニフォーム、スパイク、飲み物などいっさいがっさい用意して待っているというチームもあれば、カメルーンのように、選手がユニフォーム姿で会場に来て、終わればシャワーも浴びずにそのまま帰るといったチームもありました。

来年は茨城には6チーム全部が来ることになっていますので、楽しみな部分がある反面、不安な部分もあります。

4 日本の優秀な面を披露できた

横浜で行われた準決勝のときの状況が、日本の優秀さを物語っていると思います。ご存知のように、あれだけの豪雨の中、試合が行われました。FIFAのメンバーは、カルチャーショックとまでは言わないけれども、非常にびっくりしていました。というのも、あれだけの雨が降った中でも、水たまりがほとんどないかたちで試合ができたわけですから。

サッカー好きの方なら、たぶん頭の中をよぎるシーンがあるでしょう。イタリアのセリエAで、99/01シーズン、ユベントスとラツィオが優勝を争った時期、ユベントスとペルージャが最終戦を行いました。この日は大雨になり、ピッチが非常に悪いコンデ

イションとなり、ぎりぎりまで試合開催が危ぶまれました。結局、試合は行われましたが、ピッチは水が浮いた状態で、まともにサッカーをするのは厳しい状態でした。

それに対して横浜では、それよりも厳しい降雨の中、それほど悪い状態ではなくボールもほとんど止まることがなかったのは、FIFAのメンバーにとっては非常な驚きだったようです。

当初、日本の梅雨の時期にワールドカップが開催されることについては、ヨーロッパのピッチのコンディションから懸念の声もあったのですが、その先入観を取り除くという意味では良いインパクトになったと思います。

5 ボランティアの参加

先にも述べましたように、コンフェデ杯に向けての準備期間は非常に短かったのですが、ボランティアの方々に参加していただき運営できたことは、双方にとって貴重な経験になったと思います。

2 / 来年に向けての課題

1 ボランティアに対するトレーニング

率直のところ、準備期間が短かっただけに、ボランティアのトレーニング期間が十分にとれなかったこと、また十分なトレーニング自体が行われなかったことが、来年に向けての最大の課題でしょう。

茨城会場に関しては、1万5千人規模のカシマスタジアムの試合運営についてはボランティアも十分経験していましたが、今回の4万人規模での試合運営に関しては、スタジアム改修工事とも絡み、コンフェデ杯の前に、Jリーグの試合を一度しか体験できませんでした。したがって、コンフェデ杯のボランティアとして参加していただくために研修を実施するのは、正直に言って不可能な状態でした。

そういう意味では、運営側からすれば、コンフェデ杯という場で経験を積んでいただきたいという気持ちはあったものの、事前にトレーニングをする機会がなかったことを申し訳ないと思っています。

来年のワールドカップに向けてという意味では、スタジアムの改修工事もすべて終了しているので、ボランティアの方々には、アントラーズの試合を利用しながら、現場の経験を数多く踏んでいただき、本番には自信を持って仕事をしてもらえよう、私たちもできるだけ努力したいと思っています。

2 ツールの準備(スタジアムの内と外)

あれば便利と思われるツールが、今回の大会では十分準備されていなかったように感じました。具体的には、ボランティアの方が観客から、トイレや入り口を聞かれたときに答えられるマニュアルのようなものです。今回、十分なトレーニング期間がなかったのですから、せめて、そうした冊子を作って渡すべきだったと思います。

また外国人対応として、外国語がしゃべれる、しゃべれないということが観客だけではなく、ボランティア同士の情報として共有できるツールも不足していたと思います。たとえばリボンで色分けして、一目で何語がしゃべれるかが分かる工夫などもあってよかったのではないのでしょうか。

来年の本大会に向けては、そういう反省をふまえてツールを準備していかなければならないと感じています。

さらにスタジアムの外では、具体的には、スタジアムから駅までの案内情報としての看板類などがあってもよかったと思います。スタジアムとの駅の間にはシャトルバスを運航させましたが、並んでいる行列の長さを見て、たとえば「駅まで3キロ」という看板があれば、自分の足で歩いたほうが早そう、歩いたら1時間程度かかりそうと判断でき、選択肢が増えることになるわけですから。

3 試合日以外の人的資源の確保

今回のコンフェデ杯では1日おきに試合を開催しましたが、試合日以外のボランティアを含めた人的資源が非常に大切だと痛感しました。試合日以外でも、取材に来たメディアに対応するボランティア、チーム練習のための会場関係の手伝いをするボランティア、それ以外にもいろいろなサポートを必要とします。

来年の本大会は、試合日より試合のない日の日数の方が多いので、特に平日は人手不足になることが予測されます。日本全体がワールドカップ期間中、休みになればいいのですが、そうでない限り、試合日以外の人的資源をどうするかが大きな課題になっています。

また先ほど申し上げましたように、12月の抽選後、どのチームが来るか確定するにしろ、2月、3月になって突然練習スケジュールなどが変更になる可能性も当然ありますので、それに柔軟に対応するためにも、やはり人手でカバーできるよう、ボランティアも含めて1人でも多くの人的資源を確保していくことが不可欠だろうと思っています。

4 適切な情報提供と共有化

たとえば今回も、「車椅子で会場に行き試合を観戦したいが、身障者用の駐車場はあるか」など、多くの問い合わせをいただきました。私もできるだけそうした問い合わせに対応しよう努めました。席を外していることも当然あり、その場合、私でもなくとも対応できるよう、なるべく情報の共有化をはかっていたつもりですが、はたして及第点が与えられるかどうかと言えば、厳しいところではあります。

やはり観客あつての試合であり運営なので、観客に不満を持たれないようなサービスをきちんと提供していかなければならないと思っています。電話で問い合わせても「すみません、今担当者がいないので答えられません」では、問い合わせの意味がなくなります。できるだけそういう言い訳をしなくてもすむよう、情報の共有化をはかり、問い合わせした時点で疑問が解決できるように努力したいと思います。

実際、いろいろ電話をたらい回しされて、非常に立腹され、私が平謝りに謝ったことも何度もありましたので。ただ、海外の方から電話されると困ってしまいますが、この対応もなんとか考えていきたいと思っています。

同時に、ボランティアのスタッフ以外でも、会場警備員、係員などにも同様の問い合わせがあると思いますので、それに対応できる情報提供と体制づくりをはかっていると考えています。

3 / ワールドカップに向けての抱負

これまでは、コンフェデ杯を振り返って成果と課題について触れてきましたが、最後に、来年の大会に向けての抱負を披露させていただきたいと思っています。

1
大会参加は
思っているより
簡単

ワールドカップへの参加の仕方は、人によってさまざまです。ボランティアとして大会に参加するだけでなく、ワールドカップのことを話題にってもらうだけでも参加したことになると、私自身は思っています。実際の試合が見られるのは、チケットを持っている人だけです。それだけでは人数も限られてしまいますので。

2
参加する限り
与えられるより
自ら積極的に

テレビや新聞で触れた、素晴らしい試合のことを話題にもらうだけで大会そのものも盛りあがるし、それだけで参加することになると思います。

大会の運営者や自治体が動くまで何もしないという姿勢ではなく、テレビ観戦からスタートしてでもいいので、ワールドカップ

**3
歴史上始めて
以来の外国人が
日本に上陸する**

に興味を持てば、自分からどんどん入りこんでほしいと思います。

実際、われわれ運営側だけで、すべてを提供するのは不可能なので、参加しようと思えば、いくらでも積極的に参加することができます。その方が終わったときに、楽しい思い出が残ることでしょう。

大量のチケットが外国で売られていることから、ワールドカップには、おそらく日本始まって以来の外国人が一挙に日本を訪れることになると思います。長野で冬季オリンピックは開催していますが、長野以外でそれほど多くの外国人が訪れたことはなかったでしょう。

しかし、ワールドカップでは北は札幌から、南は大分まで国内10都市で開催されるわけですから、日本全体に多くの外国人がいることになります。また当然、それ以外の地域も移動しますし、試合のない日の観光もあるでしょう。京都、奈良、ディズニーランドだけではなく、日本の多くの都市に、ツーリストやチームのユニフォームを着たサポーターたちが、大量に存在したり移動したりする状況が想像できるでしょうか。

そういう意味では、会場地だけの問題ではなく、どういう状況になるか興味半分の部分と、ちょっとこわさも感じています。

**4
万博以来全国民に
インパクトを与える
イベントに**

私自身、東京オリンピックの前年に生まれたので、そのインパクトは全然分かりません。現在38歳になりますが、自分自身の成長過程の中で、一番インパクトのあったイベントは、70年の大阪万博です。月の石、新幹線……今では当たり前のことも、子供心には大変なインパクトでした。

そこで、ワールドカップはそれを上回るイベントになってほしいと願っています。お祭り騒ぎという意味ではなく、大阪万博の遺産がリニアモーターカーや遊園地などのかたちでさまざま残されているように、ワールドカップが開催されることにより、サッカーのイベントを超えて、さまざまな財産が残ることを心から願っています。

子供が大きくなったときに、日本で開催されたワールドカップが生涯の思い出になってくれたらうれしいと思っています。

コンフェデ杯の成果と課題をふまえ、私自身、来年の本番に向けてモチベーションを高めつつ、素晴らしいイベントにするよう取り組んでいきたいと思っています。

ボランティアから見たコンフェデレーションズカップの成果と課題

竹原典子 横浜・茨城会場ボランティア参加者

1 / ボランティアの立場から見えてきたこと

今回、スタジアムボランティアという立場からコンフェデ杯を振り返ることが、様々な方の、特に、横浜国際総合競技場でスタジアムボランティアをしている方々の協力により実現しました。彼らは、この競技場に所属するボランティアで、Jリーグの試合や横浜市主催のイベントでボランティアとして活動しており、昨年はスーパー陸上での経験もあります。

私も今回は、この方たちと一緒に仕事をしました。また私は、Jリーグの某チームのボランティアをしていますので、その経験もふまえた話をさせていただきたいと思います。

Jリーグのボランティアとしては、来年、FIFAワールドカップがありますので、Jで得た経験をそれに生かしたい、また逆に、ワールドカップで得た経験を、その後のJリーグに生かしたいという2つの思いがありました。

その具体的な手がかりとして、今回横浜での準決勝、決勝戦でボランティアをした人たちを対象にアンケートを実施しました。

対象者の内訳は、一つは、先ほど紹介した競技場のボランティア。もう一つが、かながわスポーツボランティアバンクで、以前神奈川県国体が開催されたときにボランティア経験のある方たちです。つまり、アンケート対象者はすべて、この競技場でのスポーツボランティアの経験がある方たちということになります。

なお、このアンケート結果の概要は、横浜国際総合競技場ボランティアの機関誌「ボランチわ」第5号に紹介されています。アンケートの回収方法は、研修会時に、参加ボランティアに配付し、活動後に記入、そして回収しました。結果は、ボランティア総数約300人、回答総数は約200通、回収率はこちらの予想を上回り、60%に達しました。

2 / アンケート概要とその紹介

1. 参加の動機

今回のコンフェデレーションズカップにボランティアとして参加した動機は、次の5つに大別できます。

サッカーが好きだから。サッカー関係のボランティアを希望していたから

ワールドカップを成功させたいから。ワールドカップに魅力を感じ、参加してみたいから。

横浜国際総合競技場でふだん活動していて、その仲間と仕事をするのが楽しいから。

神奈川県に住んでいるので、県や市に貢献したいから。

自分のボランティア経験を国際試合で生かしてみたいから。

2. 業務の指示系統について

混乱が生じたと思われがちですが、「良かった」が48%で、ほぼ半数が満足していると答えていました。と同時に、「不足した」の34%より、3分の1が指示の足りない中で活動していたことがわかります。

3. お客様・メディアなどへの対応について

あくまでも実感ですが、「良くできた」(39%)、「なんとかできた」(56%)を合わせると95%になり、ボランティア自身はほぼ全員が充足感を持って活動していたようです。

4. 語学力について

「役にたった」13%、「もっと勉強する」27%ですが、「使わなかった」が60%を占めています。観客がほぼ日本人だったので、多くのボランティアが外国語は使わなくてすんだ、というのが事実でしょう。

5. 競技場内の場所施設の把握について

今回活動を行ったボランティアの、横浜国際球技場での活動回数は平均5～6回。ボランティア活動やJリーグでの活動に慣れているので、「良くできた」は62%に達しています。反面「良くわからない」23%、「迷った」15%となっています。不慣れなボランティアが活動する際のフォローを検討する必要がありますでしょう。

6. 今回の活動全般について

Jのボランティアより拘束時間が長く、観客数が格段に多い中、「気持ちよくできた」(48%)と半数が答えましたが、「疲れた」(42%)、「よくできなかった」(10%)との回答もあります。ボラ

ンティアが快く活動できない状況にあったのはなぜでしょう？

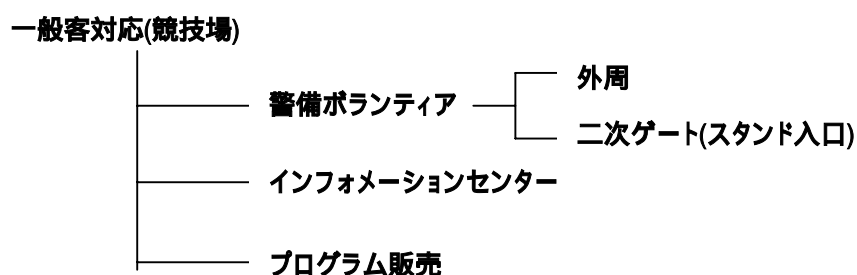
7. 業務マニュアルについて

業務マニュアルは横浜も鹿島も、大きさは違いますが、内容はそれなりによくできていると思いましたが、実際、私は現場でよく活用しました。

ボランティアも、「役に立った」と50%が答えています。あとは、「役に立たなかった」(32%)部分について、どういう点が不足だったのか、検討していきたいと思います。

3 / 業務について

今回のコンフェデ杯においては、横浜会場では、約300名のボランティアが4つの分野に分かれて活動していました。その内容は以下の通りです。



メディアセンター補助(競技場)

ADセンター補助(新横浜プリンス)

ボランティアセンター(スポーツ医科学センター小アリーナ)

簡単にポジションごとの業務説明をしておきます。

< 警備ボランティア >

- | | |
|-------|---|
| 外周 | 一般入場客の入場導線を分離してコントロールし、管理エリア内(チケットを切って入場したエリア)への円滑な入場を実施する。主に、入場者のチケット確認、チケット確認後席に対応した1次ゲートへの誘導、入場時のチケット確認・所持品検査等の広報。 |
| 2次ゲート | 4F、5F、7Fのスタンド入口で、一般観客へのチケット確認・案内・誘導。また、今回ペットボ |

トルの持ち込みが禁止されていたので、ペットボトルから紙コップへの移しかえを観客に依頼。

< インフォメーションセンター >

開門から試合終了後 30 分まで、観客にスタジアムを含めた開催地情報を提供する。

< プログラム販売 >

場内 8 拠点で、プログラムの販売を行う。プログラムの在庫管理と金銭管理も行う。

< メディアセンター補助 >

取材申請者に対するインフォメーションと受付業務。

< ADセンター >

セキュリティーコントロールのために所持する ADカード（編集注：Accreditation Card。認可証）の制作業務補助。

< ボランティアセンター >

参加ボランティアが活動しやすいように、事務局の業務をサポートする。私は横浜ではこの役割をつとめた。受付事務、食事の準備を含む。

4 / ボランティアから見たコンフェデレーションズカップ

今回のコンフェデ杯での体験を通じて、ボランティアとして感じたことを少し述べさせていただきます。運営の方もいらしますので、来年に向けての参考にさせていただければと思います。

業務内容と水準が不明確

1. 業務・事前準備について

業務の範囲と水準が不明確だったことに加えて、経験不足のため、業務の徹底が十分ではなかったという実感があります。たとえばチケットの確認が不徹底だったために、スタンド内で観客が席についてもめたり、スタンド内にペットボトルや空き缶が残されていたケースもありました。

また、今回ボランティアが金銭の管理もするため不安を感じながら業務を行っていたり、商行為に携わることで、ボランティアの良さである営利に左右されない活動が出来たか疑問の声も聞かれました。

一方、ADセンターやメディアセンターでの活動については、自分の語学力を十分に生かした、ボランティア同士の交流を十分に出来たなど充実感を感じたとの感想も挙げられました。

私が活動している Jリーグのチームの試合では、一度スタジ

危機管理マニュアルが不可欠

アムに雷が落ちて試合が中止になるという経験があり、危機管理の必要性を強く感じています。今回も、準決勝の強烈な雨をしのぐための観客の誘導導線が事前に把握されておらず、雨具の販売に関するトラブルなどもありました。本番も梅雨時の開催なので、危機管理マニュアルが不可欠だと思います。

当日、欠席者や遅刻者、ドタキャンなどがあり、研修を受けていない業務への突然の業務変更がありました。何の情報もなく経験もない業務への配置転換が為されたため、活動のモチベーションが下がり、不安を感じながら業務を行うことへの疑問が現場にはありました。また、自分の力を生かせない配置だとの回答もありました。

人手不足により休憩や食事時間がとれずに活動をしていたボランティアもいました。また、2次ゲートでは、1人でチケットチェックとペットボトルの移し替えという2つの業務を同時にこなさなければならず、疲労や負担が大きかったと思います。そのためにチケットチェックが曖昧になり、スタンド内のセキュリティが一部崩れたことを残念に思う声もありました。

スポンサーの方には失礼かもしれませんが、スポンサーの中には、威圧的な態度で臨まれた方もいて、その対応に戸惑いを感じながら活動した人もいます。

不慣れな活動の中、観客との交流がボランティア活動の最大の源になっていました。

2. 情報の共有・指示系統・他業務との連携について

疑問が発生した時の指示系統やお互いの連絡方法がまったく無いに等しい状態でした。また、組織の体系もよく分からないまま活動していました。連絡方法がないため、ボランティアとシミズスポーツ（編集注：イベント等の会場警備を専門とする業者）の担当者が、自主的に互いの携帯電話の番号を教えあって連絡を取り合い、現場を調整していた事実があります。プライバシーの問題もありましたが、現場での活動をスムーズに行うためにそうせざるを得ませんでした。

おこがましい言い方になるかもしれませんが、一緒に業務をする業者やアルバイトの方の業務水準が低く、話をしても通じないこともままあり、彼らと一体感を持って業務を行うのが難しいと感じました。

本部や異業務間との情報のやり取りは非常に難しく、最新情報が得られないため、孤立感を感じながら仕事をする人も少なくなかったようです。解決法としては、休憩時間に自分で

疑問発生時の指示系統
が不明

水準低い業者、アルバイト

持ち場周辺を歩いて情報を収集するしかありませんでした。リーダーの経験や人柄により、活動がスムーズに行えるかどうか左右されることが、実感として分かりました。交通手段等の競技場外の情報が特に手薄でした。

5 / 運営側への提案

次に、今回のコンフェデ杯の経験を、ワールドカップ本番の運営に少しでも生かされることを期待して、ボランティア活動に関わる運営の提案をさせていただきます。

言語別ボランティア の明示化を

1. 業務について

外国語使用が可能なボランティアを、ボランティア同士が分かるように明確にしていきたいと思います。具体的には、言語別にリボンや国旗のシールなどで区別できるようにしたり、インフォメーションブース前に対応言語を明示するなどが挙げられます。

ボランティアの受付は、全体の五十音順と業務別のIDによる受付簿の2種類が良いと思われます。業務変更者の受付で今回戸惑いましたが、業務変更者の受付は前ポジションに統一した方が混乱は少ないと思います。もちろん、本大会ではそのような業務変更は基本的にはないものと思いたいですが。

ボランティアが金銭の管理をするのは、非常に不安でした。観客とのトラブルの元になると思われるので、もしボランティアがこの業務を担当するのであれば、業者の方が管理し、近くに警備員を配置して欲しいと思いました。

1次ゲートでペットボトル・チェックがあるので、売店では紙コップに移しかえて飲み物を販売すると、効率よくセキュリティーが高まったと思います。

ボランティアの配置についてもう少し考えて欲しいと思います。1人が2つの業務を受け持つのは難しいし、また、研修を受けていない業務への急な変更は業務の統一性がなくなります。もちろん人手は多く確保して欲しいので、エキスパートスタッフがボランティア事務局にスタンバイしておくのも良いと思います。

今回、チケット・チェックの甘さが指摘されていますが、2つの業務をさせられたことによる見落としがあった点是否定できません。ボランティアの中でも悔しい思いをしている人もいます。業務の兼務をやめ、チケット表記が見やすくな

金銭管理には 不安が伴う

業者の研修で 業務水準を高める

見やすい
チケット表示を

ると、チケット確認業務も徹底しやすくなります。
ボランティアの活動シフトを組んで、業務に従事する時間と休憩のメリハリをつけた方が、疲労や集中力の欠如がなくなり、観客への対応の質が上がるでしょう。また、疲労回復・気分転換・リフレッシュができるよう、休憩所を充実させてほしいと思います。

業者の研修で
業務水準を高める

2. 業務について

研修だけでスタジアムを理解するのはなかなか難しい面があります。スタジアムの構造を良く知った人を、ポジションごとに最低1人は配置するべきではないでしょうか。また業者の方にもしっかりした研修を行い、業務水準を保っていただきたいと思います。その方が、より統一感を持って、お互いに業務ができると考えます。

ハンディキャップ
対応の研修も

今回準備期間がなかったため、ハンディキャップを持った方への対応は、個人の経験や能力に頼ることになったので、やはりきちんとした研修を受けて必要なスキルを持っておきたいと思います。

研修にて、指示系統について組織図を用いて説明し、さらに現場の孤立感をなくすために、ボランティア間や他業者との関連性をきちんと説明していただきたいと思います。

危機管理として、天変地異や非常事態時の対処や観客誘導導線を把握しておきたいと思います。

研修段階でグループ
活動を

研修にて、ボランティア間の交流場面や思い出づくりの場面を設けたいと思います。業務をいくら理解していても、統一感がないと良い活動はできません。業務別に、研修時にグループごとに意見交換してみてもはどうでしょうか。事前にグループ活動することで、リーダーが班員を把握しやすくなると思います。

日本人サイズの
ユニフォームを

3. ユニフォームについて

ユニフォームのTシャツがフリーサイズしかありませんでした。私は身長が163センチあるので問題ありませんでしたが、155センチの方などは、まるでパジャマのようになってしまいました。日本人の体系にあわせたサイズにして欲しいです。その方がステキに見えるでしょう。

これは自己主張ですが、今回ボランティアと業者が同じユニフォームで活動していましたので、観客には区別がつかせません。これではスポーツボランティア活動が理解されにくいので、できればユニフォームで区別していただければと思います。

スタジアムで
必要なハンドブックを

ボランティアの意見
を盛り込んだものに

4. マニュアルについて

全体研修に使用する業務マニュアルとは別に、スタジアムでの活動中に必要な見取り図、非難経路、ゲート、トイレ、交通情報、時刻表、売店、インフォメーションセンター、簡単な英語会話集を載せたマップ仕立てのハンドブックがあると助かります。カシマ今でのボランティア活動時に、スタジアムに不慣れな私に地元のボランティアの方がくれたJリーグのマップが非常に参考になりました。

業務マニュアルは、全ての情報をJAWOCサイドでボランティアに提供するのではなく、業務別研修時にお互いの情報交換のなかで、ボランティアたちが書き込んで作り上げていく部分もあった方が良いと思います。その方が、ボランティアの自主性や大会への参加意欲を高められるのではないのでしょうか。

最後に、今回茨城と横浜の2つの会場で活動して感じたことを少し述べさせていただきたいと思います。

Jリーグとは全く異なるコンフェデ杯

まず第1に、コンフェデ杯の運営方法は、Jリーグのそれとは全く異なるものでした。例えば、本大会では、身につけるものが上から下まで全身コーディネートになる予定です。全身を制服のような着こなしで活動することは、普段のJリーグでの活動ではありえません。

また、興味深かったのは、競技場によりボランティアが任される業務が異なっていたことでした。同じJAWOCが運営している大会なのに、どうして違うのか非常に不思議でした。いったい今回のボランティアの配置はどのような基準で行われたのでしょうか？ 私はその意味をずっと考えていました。

ボランティア自身の安全確保、観客対応技術、世界基準のサッカー運営を知るための研修の一環などなど、様々な答えが浮かんできます。このようなことが基準であれば、問題はあったとしても、それはそれで本大会に必ずつながる何かが残ったはずですが、ただ、私が懸念しているのは、人数の帳尻や運営費用で確保できる頭数を基準にして業務を割り振ったのではないかと、ということです。

もし、運営側がそのような意向でボランティアを募集するのなら、参加したボランティアたちも帳尻合せの活動をするかもしれません。これでは、スタジアム全体が統一性をもった活動をするのは難しくなってしまいます。

観客が心地よく過ごせることがボランティアの充実感

では何が一番大切なのでしょう。私は、カシマではスタンド業務、横浜ではボランティア事務局の業務を担当しました。現場と、その活動を支える2つの業務経験を通して、大切なのは能力や業務の習熟度ではなく、組織力と統一感だと実感しました。サッカーのゲームでも、組織力と統一感があれば個人の力をカバーすることができるのと同じです。

そして、それを実現する手立てはやはり研修だろうと思います。研修を実際に企画するのはJAWOCですが、それに加えて、私たちのようにJリーグのボランティア活動に携わっている者が、マニュアル作りや研修そのものに参画できたらと強く思うようになりました。ですから、ボランティア事務局のように、ボランティアが活動する環境を整える場所に、私たちのような経験者を入れていただきたいと切望します。

また、現場で安心感を持って活動できないと、ボランティアの顔

がひきつってしまいます。現場で最後に頼れるのは、共に活動する仲間です。特に経験のない者にとって、その傾向は強くなることから、リーダーの存在は大きくなります。現場で安心感を持って活動するためには、研修を含めた事前準備から、ボランティア事務局に配置された者がお互いに仲間であるという統一感を持って活動できる雰囲気づくりも欠かせません。

警備の専門家が自分たちをきちんと守ってくれているという安心感も重要です。しかしながら、スタジアム内にもものものしい雰囲気があふれていると、観客はどう思うでしょうか？

観客として来ていた私の友人も、業者の方への質問の答えが2時間半も返ってこなかったことを怒っただけなのに、危険人物と思われたのか、以後最後まで警備員に行動を監視され、非常に不愉快な思いをしてスタジアムを後にしています。そういうときにも、ボランティアが100万ドルの笑顔で対応できれば、少しは気分も和らぐと思うのです。

ボランティアが安心感を持って観客に対して笑顔で迎える。それによって、観客もスタジアム内で自分たちの居場所が見つかり、心からサッカーを楽しむゆとりが生まれます。そして、観客が気持ちよく過ごせるようにサポートできた時に、スポーツボランティアは自らの活動に充実感と喜びを見出すことができるのです。ワールドカップは、そのような自分たちの喜びを見出せる大会にしたいものだとは心から願っています。

市民側から見たコンフェデレーションズカップの成果と課題

小島 裕範 Alliance2002 代表

皆さん、初めまして。新潟で Alliance2002 という市民団体の代表をしている小島です。

3つのグループから成る Alliance2002

まず Alliance2002 について説明させていただきます。一応NPOグループと称していますが、いわゆるNPO法人格はまだ取得しておりませんで、検討している段階です。1998年春に発足しまして、だいたい100名前後の関係者がいます。メンバーシップがいかげんなので、“関係者”という言い方をしていますが、大きくは3つのグループに分かれています。

一つはサポーターのグループで「ウルトラ新潟」、略してUNIと呼んでいます。もう一つが、ボランティアの「スピリット・オブ・新潟」でSONと呼んでいます。これは、アルビレックス新潟の試合を中心に、その他新潟で行われるさまざまなスポーツ・イベントにボランティアとして参加しています。3つめは、ヘッド・クォーターでHQと呼んでいます。前記2つのグループの活動をコーディネートしながら、資金調達、ホームページを利用した広報、独自のイベントなどを手がけています。独自のイベントの代表に「もくはちCLUB」があります。これは、毎週木曜日、夜の8時～9時にかけて、参加費500円で1人でもグループでも自由にサッカーができる、というものです。

新潟のゴール裏を仕切ったUNIグループ

これら3つのグループはそれぞれの立場から、コンフェデ杯に関わりました。まずUNI。こちらは正規のメンバーは10人程度ですが、動員力はそれ以上にあり、アルビレックス新潟のいくつかのサポーター・グループの中では有力なグループとして、ゴール裏を仕切っています。

今回のカメルーン戦、カナダ戦でもゴール裏を仕切りましたが、コアになったのは、各クラブから馳せ参じてきた仲間たち100名で、彼らとともに「ゴール裏数千人の青い波を起こした」と自負しています。

サポーターの思いを伝えたコンフェデ杯

コンフェデ杯における彼らの活動の様子を聞いたり記録を読んだりすると、「初めて日本代表を見る新潟の人たちに代表戦のゴール裏の雰囲気を変えたかった」という思いと、「せっかく新潟で試合があるのだから、新潟を全国にアピールしたい」という2つの思いで、彼らなりのアプローチをしたようです。そして彼らにとってのコンフェデ杯の成果は、かなり達成されたのではないかと考えられます。

ゴール裏チケット問題はワールドカップに持ち越し

ただ、皆さんご存知のように、ゴール裏の指定席の問題もありました。サポーターが一定の場所に固まられるはずがないのに（編集注：コンフェデ杯では客席は全席指定となっていた。ワールドカップも同様）、ゴール裏に固まっていたのも事実です。結果として、半ば強制的に席を移動させられたケースもかなりあったと聞いています。ワールドカップ本番でも、この問題は必ず発生するでしょう。結果はどうなるにせよ、このことについての問題意識が芽生え、問題提起できたことも成果と言ってよいかもしれません。

反面、ゴール裏でどういう問題が生じ、どこまで解決できたかという点について述べたいと思います。あるサポーターの記録では、次のように紹介されています（要約）

カメルーン戦でチケットの交換を頼んだところ、最初はケンもほろろに断られたケースがほとんどだった。なかには生後半年くらいの乳児を連れた家族もあり、サポーターたちに囲まれると危ないので、移動をお願いしても聞き入れてもらえなかった。どういう状況になるか想像できないらしい。ところが実際に試合が始まってみると、ほとんどの人が席の交換を希望した……2002年のワールドカップで日本代表の日本人サポーターだけならまだしも、アルゼンチンやイングランドのサポーターならどうなるかと考えると、背筋が寒くなる。

この問題について、サポーターと一般ファンの間で相互理解が十分になされないまま終わったと思います。ゴール裏だけで工夫してすむ問題でもないでしょう。また、本番のワールドカップまでに解決できるのかどうか……たぶん厳しいでしょう。残念ながら、われわれも答えを持っていません。

管理エリア内ボランティアの中核となったSONグループ

次に、ボランティア・グループSONのコンフェデ杯についてお話しします。

SONはだいたい30人程度のメンバーで構成されていますが、今回は、3回の試合に各10人ずつが管理エリア内ボランティアとして活動しました。今回新潟で募集されたボランティア総数はだいたい300～400人とされていますが、管理エリア内ボランティアの中核になったのは、アルビレックス新潟のリーグ戦で活動し

**ボランティアには成果
感はあまりなし**

ているボランティアたち 20~30 人で、そのうち 10 人が SON でした。スタジアム内だけのボランティアについては持ち場ごとにリーダーが決められていましたが、総数 20 人のうち 3 名が SON から選ばれました。

つまり、SON の位置付けとしては、日常的な活動を評価していただいた配置になったと思っています。ただし、メンバーに成果を聞いたところ、「あまりなかった」というのが実感のようでした。したがって、ワールドカップ本番に向けてのボランティアのエントリーも検討中ということでした。

**ボランティアが活用さ
れる仕組みが未整備**

その理由として、口ではボランティア・グループとしての SON の力が必要と言われながら、実際には、力が活用できるシステムが整備されていなかったことが挙げられています。アルビレックス新潟の試合を通じて培った自分たちの経験やノウハウをぶつけてはみたが、芳しいフィードバックがなかった、それは本番でも改善の見込みが薄いのではないかという疑問も寄せられています。

具体的に言えば、研修会は 4 回ありました。ボランティア採用の条件として、研修会 4 回すべてと、3 試合全部に参加することが課せられました。これで多くの人間はふるいにかけてられました。僕もそうでした。正直に言って、平日の夜と日曜日をつぶして研修に参加し、平日を含む 3 試合すべてに参加という条件が絶対視されたら、現在の日本企業の勤務体系の中では参加できる人間はかなり限られてくるでしょう。

そこまで拘束しておいて行った研修会の内容がほとんどなかったと言われていています。運営サイドに対する不信感、焦燥感を生んだだけに終わってしまったそうです。その結果、研修だけでやめた人もいます。

**研修内容の不十分さが
もたらした現場の混乱**

こういうわけで、実質ぶっつけ本番に近いかたちでコンフェデ杯を迎えました。現場から、指示を求める要望がどんどん寄せられますが、それに対してほとんど対応できないという状況で、先ほどの竹原さんの報告にもあったように、2 時間のたらい回し状態なども発生しています。つまり、運営サイドに地元のボランティアを活用するという意志があまり感じられなかったようです。

場内整備の専門人材派遣会社であるシミズスポーツとの問題もありました。シミズスポーツが、事前にどの程度、地元のボランティアとの連携をはかるよう調整、準備していたかは分からないのですが、私がボランティアとして活動して見聞した範囲で判断する限り、そこで仕切っているシミズスポーツは、正直言っておそまつでした。

次に、運営サイド JAWOC 新潟に対する不満としては、アルビレックス新潟の試合でのボランティア経験があるかどうか、でした。JAWOC 新潟の人員は、春から一挙に 5 倍に増え、70 人体制になりましたが、現場での活動経験はたぶんなかったと思いま

3つの会場で6つのイベントを企画

す。

もし経験があれば、ずいぶん違った対応になり、われわれボランティアとのコミュニケーションももっとスムーズにいったのではないのでしょうか。また事後フォローも正直言って十分ではなく、一応アンケートは実施しましたが、それに対する反応は今のところないと聞いています。ボランティアのチームリーダー20名程度を集めた会合が一度開催されただけのようです。

HQが仕掛けた「万代ファンビレッジ」はなぜ失敗したか

最後に、ヘッドクォーター（HQ）が仕掛けた「万代ファンビレッジ」というイベントの話をしていきます。これは今回も後援していただいている日本サポーター協会の「ファンビレッジ構想」の名前を貸していただき、それに先駆けたかたちで、新潟市内の中心、万代シティを中心にイベントを企画、実施しましたものです。結論から言うと、竜頭蛇尾に終わり、失敗でした。

このねらいは、県外から訪れたサポーターの方々は試合後帰れないことが多いので、それならみんなで楽しもうということで、われわれなりのホスピタリティを発揮し、代表戦が開かれたら、また新潟に来てほしいと言ってもらえるような仕掛けをしたいということでした。具体的には、3つの会場で6つのイベントをやろうとしました。

1番目は、クラブ・イベント。新潟フェイズというイベントホールで、カメルーン戦の後、一晩中騒げるイベントを企画しました。2番目は、Jサポ対抗ミニサッカー大会。これは、カメルーン戦の前に、全国の各チームのサポーターによる大会をやろうというもの。3番目は、その合間に、「もくはちCLUB」を万代シティで開催しようというもの。4番目は、「ザ・カップ」という映画を、クラブ・イベントとチケットを共通にして無料で見られるように企画したもの。5番目は、実はこれがメインだったのですが、サポーターの簡易宿泊所の提供。カメルーン戦のクラブ・イベント以外でも、新潟フェイズを開放するので、ごろごろ寝てほしいという企画。6番目は、日本戦のクローズド・サーキット。カメルーン戦を想定して、スタジアムで見られない人のために、新潟フェイズで大画面を用意して観戦しようというもの。これは放映権の問題があるので、県の準備委員会と連携しながら進めました。

NPOが勝手に企画しているわりには、あまりにも大それた仕掛けばかりなのですが、案の定、コケました。実際に実現できたのは、クラブ・イベントと出張「もくはちCLUB」と映画の上映会で、力を入れていたミニサッカー大会、簡易宿泊所、クローズド・サーキットはいずれも実現できませんでした。

それぞれなぜダメだったかについて簡単に分析してみました。ま

企画ミスと施設側のハードルで失敗

ズミニサッカー大会は、完全にわれわれの企画ミスでした。カメルーン戦の前に試合をすといくらいっても、Jサポーターにとってはスタジアムに並ぶことの方が優先ですから、ビッグスワンから万代シティまでわざわざ移動することはありません。実際、全然チームは集まりませんでした。

それから簡易宿泊所は、施設側がノーでした。最初はうまくいきそうな雰囲気もありましたが、途中でコケました。メディアで紹介されるや、施設側がセキュリティの問題で不安を感じ、喧嘩などいざという場合、われわれが責任をとれる団体かどうかが問われました。また施設使用料の問題もあり、結局ハードルをクリアできませんでした。

最後のクローズド・サーキットは、放映権の問題がクリアできませんでした。カメルーン戦の2週間前近くになっても結論が出ず、結局実現できませんでした。後日確認すると、鹿嶋と横浜ではクローズド・サーキットが実現できたいので、どうなっているのか、と思いましたが。

Alliance2002 とコンフェデレーションズカップの総括

いずれにしても、振り返ってみると、われわれの運営能力や企画能力が不足していたのは事実です。ただ、われわれなりにここまで仕掛けようと思った要因の一つは、新潟フェイズのイベントなどを企画しているプロのイベントアーがいたからです。日本代表の試合が2試合あるのは、もしかしたらワールドカップ以上のチャンスと思い、ぜひイベントを実現したいと思ったのです。

ところが残念なことに、彼の本業が忙しくなりすぎてしまった。そこはNPOの悲しさで、そうなると、どうしようもなくなります。もう少し周到的な準備をすることができれば、実のあるイベントが実現できたかもしれませぬ。あるいは、まだ新潟には市民主催のイベントに関する理解と関心が深まっていないところもあったのかもしれない。

幸い、われわれのホームページのBBSには、全国のサポーターから激励や感謝のメッセージがたくさん寄せられ、それだけが救いでした。しかしその内容は、われわれが提示したサービスについてではなく、試みを実行に移した姿勢についての共感や賛辞が多かったように思います。それで甘んじて自画自讃しては、あまりにもアマチュアすぎると反省もしています。

いろいろなメディアから取材を受けましたが、そのとき毎回聞かれたのが、「ワールドカップ本番では何をするか」ということでした。そのときもうまく答えられなかったのですが、今も具体的な答えは持っていません。

今回のコンフェデ杯のときは、かなり来る人たちの層も違うでしょうから、そういう人たちに対して適切なサービスやホスピタ

充実感以上に、市民団体の限界を実感

リティがきちんと提供できるか、それを具体化する力がわれわれにあるのか、それらを可能にする土壌が周辺にあるのか、またそれが1年で整うのか……これらもろもろを考えると、正直言って、悲観的になります。

最後に、Alliance2002として、コンフェデ杯を終えた総括をしたいと思います。

一言で言えば、充実感はありましたが、それ以上に、自分たちの限界を感じた、というのが正直な感想です。たしかにゴール裏では「ウルトラ新潟」を中心に充実感を感じたメンバーはいましたし、Alliance2002の自前イベントで本番を頑張ろうという意欲を示すメンバーもいます。

われわれHQサイドとしては、いろいろな関わり方をしてくれたメンバー1人1人に、より充実した活動ができる適切な場を与えてあげたいという思いで努力してきました。その立場からすると、いろいろ工夫し、汗を流し、ストレスを貯めて、これだけのことしかできなかったのかという気持ちの方が、どちらかという強いわけです。

同時に、ここまでたどりつくのにAlliance2002の発足以来、3年かかっています。あと1年で何ができるのかを考えると、不安になります。結局われわれAlliance2002は、根強い市民の無関心を変えることはできていませんし、関心のある市民の支持も十分にはとりつけられていません。このままいくと、新潟の良さを世界に発信するどころか、新潟の無関心を世界に発信してしまうことにもなりかねません。どうしてそうなるのか、どうしたらよいのか……それに対して、自分たちはあと1年で何ができるのだろうか。

コンフェデ杯で自分たちが直面して超えられなかったさまざまな壁を考えると、決して楽天的ではられません。

第2部 ディスカッション

ゴール裏のチケット交換をめぐって

中塚 第2部のディスカッションの進行ですが、まず皆さんからいただいた質問をふまえて、パネリストの方々からご意見をいただきます。またその都度、会場の皆さんからも追加の質問やご意見をどんどん出していただきたいと思います。

第1部のプレゼンテーションの内容をめぐって、いくつか質問が出されていますので、それを紹介させていただきます。

まず、名古屋大学の浦和さんから、小島さんが指摘されたゴール裏のサポーターと一般客とのチケット交換について、「コンフェデ杯に限らず、サポーター対一般客の対立に関する態度と意見を教えてください」という質問が寄せられています。同様に、山田さんから、「ゴール裏席のチケット交換依頼は、なるべく紳士的に行ってほしい。試合が始まれば分かる、という態度では、サポーターは傍若無人に見えるだけ」という意見も寄せられています。

それに対する小島さんの意見を伺う前に、チケットの問題についても関わられたことのある長岡さんから、ゴール裏席のからくりについてご説明いただきたいと思います。つまり、指定席になっているので交換できないということなのか、それとも実際にはなんらかのからくりがあるのか、ということですが。

長岡 チケッティングそのものを担当しているわけではないのですが、鹿島アントラーズの体験と今回のコンフェデ杯の話を交えてお答えさせていただきます。

今回のコンフェデ杯に関しては、まずFIFAの方から、2つの大きなリクエストがありました。

一つは、来年のワールドカップを見据えて、ほぼ同じチケッティングのスタイルをとってほしいこと。つまり、チケットの表記を4種類（赤、青、緑、黄色）にセクター分けすること、またすべての座席を指定席として売ってほしいことでした。もう一つは、チケットを偽造されないようにホログラム技術を実施してほしい、とのことでした。

ただ、ここから先は個人的な意見ですが、私自身、3回のワールドカップの観戦体験で言えば、スタジアムに着いてからサポーターがチーム同士で座席交換を要求する場面に遭遇したことはほとんどありません。

運営側としては、日本側のサポーターと相手側のサポーターが隣り合わせにならないようにチケッティングを考えるなどの配慮は必要で、そのためにチケットを申し込む際、さまざまな顧客データをいただいています。それをベースに、セキュリティの面から考え

ていくつもりです。もっとも転売されて、日本の観客の中に、外国対戦チームのサポーターが入ると、そこでセキュリティは崩れてしまいます。

そういう意味では、チケットを購入した本人がそのまま入場してもらわないと、われわれが想定するスタジアムのセキュリティ計画は根本的に崩れてしまいます。警備員や警官だらけにならないセキュリティを実施するには、決められた席に座るという方法しかないでしょう。

私自身、イングランドのスタジアム・マネジメントの担当者と話をしたとき、現行のJリーグのチケットの売り方、特にゴール裏が自由席になっていることを告げると、「では、観客と同数の警備員を用意するのか」と冗談半分、本気半分で言われたことがあります。そのくらい、ヨーロッパではリスクが大きいわけです。

ヨーロッパでは、ホームとビジターのサポーターエリアは厳密に分けていますし、警備もきちんとしています。それだけのきちんとしたチケットングをしているから、セキュリティが守られていると言えます。

指定席化にするのは、そういう背景があるということは、この場を借りて皆さんにもご理解いただければと思います。

中塚 申込みの段階でいくつかの情報提示をするわけですが、それをもとにして、運営サイドとしては、異質な人間が混在することのないよう割り振っているわけですね。

長岡 たとえば、アントラーズとレッズが試合をするときに、アントラーズのサポーターの中にレッズのサポーターをいれるという馬鹿なことはしません。不要なトラブルを起こさないよう、入場口を分けたりなど、極力両者が接触しない配慮をしています。

そういう事前準備をきちんとするのも、運営側の責任だと思います。ワールドカップでは多くの人が海外から来るわけですから、まず情報をきちんと把握することがセキュリティの第一歩だと思っています。

サポーターの団による応援スタイルはスタジアムを盛り上げる要素となるか？

小島 ゴール裏で、熱狂的なサポーターと一般客が一緒になるときの問題について、また、サポーターの強引なチケット交換要求の問題についてですが、Alliance2002の代表という立場もふまえて、私の意見を述べさせていただきます。

まず威圧的な態度でチケット交換を要求するサポーターは、どう考えてもバツです。もしかしたら新潟でもそういう例があったかもしれませんが、その点については反省すべきことだと思います。

またもしかしたら、座席の一角が同じユニフォームの団で占められ、同じ動きをする現象は日本特有のもので、国際的標準からすれば不気味かもしれせん。

ただし、少なくとも日本のスタジアムにおいては、ああいう応援スタイルが欠くべからざる要素になっていることだけはまちがいありません。たとえば新潟ビッグスワンにおける青い服、タテノリなども、スタジアムを盛り上げる大きな要素として無視はできません。これは現実として認めるべきだと思います。

そのためには、同じ服を着て、同じ動きをしたい人たちを1カ所に集めてしまった方が、観客、マスメディアなどいろいろな立場の人が喜ぶのではないのでしょうか。ですから、そのための仕組みを考えたほうが、よほど現実的でしょう。

では、そのために一般のわれわれに何ができるか。たとえば、Alliance2002のホームページ上で、あるいは一般の口コミを通じて、「ゴール裏の1階席なんて、見にくいし、普通の人たちが行くところじゃないよ」と訴える。つまり、「見にくい」し、「ファナティックで傍若無人なふるまいをする可能性のあるサポーターに囲まれる」から、それを避けたいなら、その席は取らない方がいいとアドバイスするわけです。それが一番現実的で、しかもわれわれに手の届く範囲でできる方法だと思います。

橋口 横浜国際でボランティアをしました。私はたまたま2次ゲートでチケットをチェックしていて、そういう目にはあっていないのですが、決勝戦のとき、やはりチケット交換をめぐって、同じような現象があったと聞いています。

そこをきちんとしておかないと、2次ゲートでチェックするボランティアは、2階席のチケットを持った客が1階席と交換すると称して押し寄せてきても、そこで止めるわけにはいきません。2次ゲートを通らないでもできるチケット交換所でも作らない限り、単純にチケット交換すればいい、ということにはならないのではないのでしょうか。

中塚 チケットは基本的に記名で、その本人でなければならないことになっているのですが、現実的に小島さんがおっしゃったような、サポーター側の希望もありますし、橋口さんが指摘されたボランティアの側の視点もあります。この件について、何かフロアのほうからご意見はありますか。

橋本 チケットを全席指定にするのはセキュリティの面でやむをえないと思います。小島さんは、新潟でのタテノリ現象がスタジアムを盛り上げる上で不可欠な要素だとおっしゃいましたが、はたしてそうでしょうか。そこまでして、まとまった団体を作る必要があるのか

どうか疑問に思います。

私は、ワールドカップのチケットが全部指定席になると予想して
いましたので、今までのように団体の応援ではないやり方が、これ
でやっと日本にも根付くのだな、と喜んでくれていますから。

ああいう存在が必要だと、みんながみんな思っているわけではな
いことも認識していただきたいですね。熱狂的なサポーターだけで
はなく、普通のサッカーファンも来るわけですから。指定された場
で見るのが普通のサッカー観戦だと思います。

小島 おっしゃる通りの正論です。私自身、ゴール裏でタテノリするタ
イプではないので、彼らの弁護もしづらく、なかなか難しい面もあ
るのですが.....。

ただ、かなりの割合で、どんな手段を講じても、どうしても自分
たちは自分たちのパフォーマンスを賞めたいと思っている人たち
もいて 確かに、端から見れば自己満足かもしれないですが 彼ら
は、こういう集まりには興味がなく、ただただスタジアムに集まる
ことに血道をあげている。そういう人たちとどういう対話をすれば
いいのかについては、ここで語っているだけでは上滑りになるよう
な気がします。

僕は、日常的にそういう人たちとの対話機会も持ち、罵倒もされ
ながらやってきた上での結論を申し上げたつもりです。ただ正論を
おっしゃられると、その通りです、としか言えないのですが.....。

日本人同士ならまだしも、外国人同士ではどうなるか

中塚 補足になるかどうか分かりませんが、去年のトヨタカップのとき、
たまたま私はバックスタンドの比較的良好席にいたのですが、1時
間前くらいからゴール裏が大変盛り上がっていて、おもしろそうだ
ったので見に行ったのです。そうすると、アルゼンチンから来たサ
ポーターたちが大騒ぎしている。その中に何人かの、日本人の一般
客もいましたが、アルゼンチン人たちが興奮して身振り手ぶりでチ
ケットの交換を要求していました。そうすると、ちょっと対応でき
ない感じです。

今回は日本人同士でのやりとりでしたが、ワールドカップでは外
国人もたくさん来ます。外国人同士のやりとりがあった場合、どう
なるのかとちょっと気になります。

坂下 まさに、私もそのことを心配しています。日本人のサポーターと
一般客同士のチケット交換なら、多少の衝突はあっても収まるとこ
ろに収まると思うのですが、外国人同士の場合はどうでしょうか。
メインスタンド以外の席で、自分の指定席に座るという習慣を持っ
ている国の方が少ないと思います。集団の場合は、特に指定席無視

の傾向が強まります。誰がそれをチェックし、コントロールするのでしょうか。

たとえば日本人が、自分の席に外国人が座っているのを発見した場合、代わってもらいたいと思っても、ボランティアが誘導するのが、警備会社がするのかというのも気になることです。集団で固まって座っていると、ちょっと怖いですね。

青山

フランスの世界カップのとき、クロアチアとルーマニアの試合に行ったことがあります。クロアチアの方は、指定席に関係なく前の方に集まり、しかも傾斜が非常にゆるやかな前の方で立ちあがってスカーフを振ってぐるぐる回す応援ぶりでもとても見にくかったので、彼らが陣取りした後ろに、みんなちょっと離れた見やすい場所に移動しました。

多くの方は日本戦が絡む場合を想定していますが、外国チーム同士の対戦ではチケットもある程度余るでしょうから、ダフ屋やチケット交換を通じて、最初の意図とは異なるまぜこぜ状態になる可能性が考えられます。

ですから、国やスタジアムの状況により異なると思いますが、指定席を無視して両国のサポーターを分けて誘導する方がよい場合もあるという気がします。その具体的な方法についてアイデアがあるわけではないのですが.....。

それから、ワールドカップではないのですが、イングランドとイタリアのチームの国際試合で、イングランドのサポーターを隔離して安全を保つために、席と席の間を無理やり空けることがあるんですね。本来指定席に座れた人たちが追い出される形になっても、その方がいいということで、イタリアではそういうセキュリティの方法がとられる場合もありました。

それがいい方法かどうかはわかりませんが、日本にそれほど多くの外国人サポーターたちが大挙して押しかけることはないかもしれませんが、場合によってはそういう方法もあるかと思います。

北岡

京都大学の北岡です。いろいろ話を伺っていましたが、少し、このあたりで考え方を変えたほうがいいと思います。

コンフェデ杯はよい経験をもたらしたと思いますが、先ほどのチケットティングもすべてFIFAが決めていることです。僕たちがやらなければならないのは、その中で、どれだけ国民性を発揮してやっていけるかということです。これはボランティアには関係ないことですし、もしボランティアが請け負うのなら、それはFIFAのどういう指示によるのかをきちんと確立してもらわなければ大変なことになります。

先ほどから、チケット交換の話がいろいろ出ています。確かにこれは人間の心理ですから、変えるのはなかなか難しい。外国人と日

本人とでは捉え方が違いますから。サッカーのレフェリーさばきと同様に、ぎりぎりのラインのところであまく流していく必要があるのではないのでしょうか。そこに日本人の柔軟さをうまく取りこんでほしい。

日本戦のことはいっさい考えないでいいと思います。日本戦をサポートする地域は限られています。それより、外国のチーム同士をどれだけきちんと運営していくかが最大のポイントなので、そこをまず考えるべきでしょう。そうしないと、コンフェデ杯の経験も生きてこないと思います。

F I F Aの指示の枠内で、どこまで自主性が発揮できるか

中塚 F I F Aの指示の枠内で動かなければならないが、その中で、日本として、あるいは各ベニュー(試合開催地)でどこまでできるか、ということだろうと思います。これについても長岡さん、話せる範囲でお答えいただけますか。

長岡 ワールドカップにおける試合のスケジュールはもう決定しております。茨城会場では、日本のチームが来ないことは確定しています。その代わりに、海外6チームが来ることが決定しており、そのうち3チームは第1シードのサッカー大国です。

そういう意味では、試合当日の運用部分は、日本国内のスタンダードではなく、両国のスタンダードに考慮しながら、国民性をどこまで理解しながら許容範囲の幅を広げていくか、ということになると思います。こちらの一方的な要求ばかりを押しつけても、彼らにとっては窮屈なだけになりますので、回りの観客に不快な印象を与えないようにしながら、秩序を保ちつつ試合を見てもらうという方法論をとらざるをえません。

ただ、ここで非常に重要なのは、国によって柔軟性の幅が違ってくることです。ですから先ほど申し上げたように、12月1日の抽選会の決定次第ということになります。6チームが決定した段階で、6ヶ月かけて情報収集し、国ごとに最も良い方法を構築していくことになるでしょう。

対戦カードによってはあまり心配しなくてもいいケースと、逆に入口の段階から厳戒体制をとり、観客の抗議を無視しても持ち物検査をするケースに分かれてくるかもしれません。いずれにしても、現在はまだ机上の理論でしかなく、すべては12月の抽選会で決まります。

現場を良く知るボランティアの意見を取り入れたマニュアルを

中塚 このテーマですっと話をしたいのですが、他のテーマでも質問や意見をいただいているので、次のテーマ、ボランティアに移りたいと思います。

 ボランティアについては、横浜国際で活動された緒方さんから、「研修内容について、現地ボランティアと意見交換をしてはどうか」という提言をいただいています。これについて、もう少し補足していただけますか。

緒方 先ほど指摘がありました、JAWOCの方は現場を知らないで、マニュアルを作られているんですよ。今回、実施されたアンケートの中にも、分厚いマニュアルがあっても、ハンドブックがなければ持ち歩けないという意見もありました。

 マニュアルづくりや研修内容にしても、それぞれのボランティアにはこれまでの活動経験があるので、JAWOCだけで作るのではなく、意見交換して、現場をよく知っているわれわれの意見も取り入れてほしいと思います。

 また何か要望を出してもJAWOCの対応も遅く、なかなか返事が返ってこないのが、現地のボランティアがイライラしてしまいます。本番のワールドカップまで1年を切っているのが、現地のボランティアと話し合いながら進めたほうが早いんじゃないかと思っています。

中塚 ボランティアに関係することなので、竹原さんにお答えいただきましょう。あるいは、竹原さんの問題意識を再び披露していただけたらと思います。

竹原 ボランティアのマニュアルについてですが、Jリーグの試合のときに使われているものを、参考までに3つほど用意してみました。大きさとしては、横浜国際で使われているものが最も扱いやすいかと思っています。いずれにしてもボランティアが持ち歩ける大きさが望ましいです。

 マニュアルの内容については、確かに自分たちのほしい情報が入ってはいるが、分厚すぎて持ち歩けないという難点があります。それよりも、現在Jリーグで出している、各クラブのインフォメーション・ガイドブックがけっこう良くできているので、そういうものも参考にしていただけると良いのではないかと思います。また、ワールドカップ用のマニュアル作成の前に、その内容について、一度現地のボランティアに研修等で投げいただくと、より良いものができるのではないかと考えています。

ボランティア休暇が根づかなければ、ボランティアの拡大は難しい

中塚 ソシオ・フリエスタの石本さんからは、同じようなことですが、「周辺の交通事情、地元情報を生きた形で知っているのは、地元」クラブのサポーターたちだと思う。彼らの力や知識を有効に生かす手段を」AWOCに提案できれば」という意見も出ています。

また、横浜国際の運営ボランティアの巨瀬さんからは、「ワールドカップで試合以外のボランティアがたくさん必要とされているが、今の日本の労働形態では、多くの人ボランティアに参加できる時間がないと思う」と指摘されています。これについていかがですか。

長岡 その通りだと思います。現在の」AWOCボランティアの募集要綱を読むと、試合日を中心に募集していて、当日は8時間の業務が求められています。逆に、試合日の業務だけではなく、練習、移動、メディア対応など、試合以外の活動についても当然人手が必要になってくるのですが、この部分に関して、現段階では対応策がとられていません。

これは私の個人的な見解ですが、現実にコンフェデ杯においても、鹿島のスポーツボランティアや主婦の方に、練習の1時間、2時間単位で活動をお願いしました。主婦の方だと「昼間の1～2時間ならば大丈夫」という声が多かったので、そのような人選になりました。そういう工夫もいろいろ必要かと思います。

ただご指摘のあったように、現在の日本の勤務形態では多くのボランティアの参加は厳しい状況です。最初に私が述べたように、ワールドカップの期間中、日本全体が休みになり、後ろめたさを感じなくてもボランティアに参加できる状況が整うといいのですが。

平日、休日、朝、夜などさまざまな時間帯での業務が求められてきますが、コンフェデ杯開催以前に」AWOCが想定して募集したボランティア業務と、実際に体験した業務との間にギャップが生じているのも事実です。このギャップをどう埋めるかについても、現在、頭を悩ませながら協議中です。ボランティアの方々からの意見に耳を傾けて、声を吸収していきたいと思っています。

理念論より具体的な段取りが必要な時期

中塚 会場にはいろいろなところでボランティアの経験をされた方がいらっしやると思うのですが、ボランティアに関連して、何かご意見はありますか。

北岡 もう理念論、理想論はやめましょうね。僕は今、大阪の高槻というところに住んでいますが、高槻市はキャンプ地の公式立候補地です。大阪国体が開催されたときの決勝戦のグラウンドが山にできま

して、その跡地を利用しようと計画しています。どうやらイタリアチームなどを想定しているようです。

先日助役に会いまして、予算について聞きましたら、今年度 350 万円とのこと。それで山の中、しかも暑い時期にどうして運営するのか。体協に頼むなど考えているようですが、今までのスキームではうまくいかない。

こちらが少しアイデアを出したのは、たとえば市のシルバー人材センターなどを活用したらどうか、ということ。ここは 60 歳以上の方が登録していて、スポーツ関係の方もけっこういらっしゃる。そういう人材を活用するとかの知恵も必要でしょう。

ボランティアの言葉の問題も出ましたが、早急にシミュレーションされたいと思うんです。たとえば、在日公館、つまり日本にある大使館、総領事館のバックアップを受けられたい。大使館はいろいろ仕切りが多いですが、総領事館は、その国の民間人が背負っているところもあります。

コミュニケーションに関しては、日本人がいくらその国の言葉がうまくても、身振り手振りまでわからなければ、どうしてもミスマンダースタANDINGが生じてしまいます。大阪万博のときに、日本のコンパニオンと外国のコンパニオンが融合したように、一緒になって参加することが大事で、しかも今のうちに早く手を打っておくことが大事だと思います。参加国は 1 つずつ決まってくるから、そのときはお願いしますと今のうちから打診しておく。

イベントには、そういう段取りが大事なのであり、理念論はもういいんです。誰かが毎日やっていかななくてはしょうがないと、痛感します。

中塚 キャンプ地ということでは、よく話に出ますが、人口 1 万 6 千人の岐阜県飛騨古川町がキャンプ地に立候補して、ルーマニアを逆指名し、町民あげてルーマニアの勉強をしているということです。ブカレストにまで行って、ワールドカップ予選のイタリア戦の応援をしてしまうという熱の入れようです。その努力のかいあって、ルーマニア・サッカー協会から内定のおすみつきをもらい、あとはルーマニアが出場することだけが懸案となっているとか。

考え方としては、2002 年の後もネットワークは残っていくわけで、そのきっかけとしてワールドカップがあると捉えることもできます。開催地になると、F I F A の制約等で難しい点がいろいろあるかもしれませんが、キャンプ候補地をはじめとして、もっとゲリラ的な活動がいろいろできるのでは、という気もしています。

ボランティアがらみで、あと 1 人か 2 人、アイデアがあればお願いします。

佐野 私は大学生で、鹿島でボランティアをしたのですが、その期間休

むと単位がもらえないという“おどし”もあつたりしました。会社にしろ大学にしろ、自主的に休むからいろいろ困ったことになるわけで、JAWOCの方から国に対して、ワールドカップの期間中、ボランティア休暇制度を認めるよう提言してもらいたいと思います。休暇期間は1週間か1ヶ月になると思いますが、ワールドカップはそれだけの価値がある大会だと思います。ボランティア休暇を認めることにより、ボランティアの意識を日本社会に芽生えさせ、活動の場を広げることができるような気がします。

長岡 私トップならすぐ了承すると思います。ボランティアの年齢制限は18歳からだと思いますが、時間的制約の多い社会人に比較すると、相対的に自由になる時間が多いということで、学生は貴重な人的資源として期待されています。

これは新聞で読んだだけでその後フォローしていないのですが、学生のボランティア活動を単位として認めるという報道があったような気がするのですが、その後どうなったのか、気にはかけております。

余談になりますが、私自身昨年シドニーオリンピックへ研修に派遣されまして、メルボルンの会場に行きました。ボランティアの中にずいぶん学生がいましたが、彼らはメルボルン大学の配慮で、オリンピックのボランティアとして活動する場合、出席扱いとなったそうです。そういう形で、地元の自治体とメルボルン大学が連携して、学生がボランティア活動しやすい環境を整えているわけです。

われわれとしても、ぜひ今回のワールドカップで、若い人に積極的にボランティアの活動を経験していただき、次のイベントにも生かしてもらいたいと願っています。

ボランティアの裁量権と責任問題をめぐって

小出 新潟の対カナダ戦を観戦しましたが、ボランティアの自主裁量権についてお伺いしたいと思います。ボランティアが決定できる権限の範囲がどうなっているか疑問に感じたからです。

というのは、試合終了後、例のバス2時間待ちを経験しましたが、ボランティアの方に「前の方はどうなっているんでしょう？」とか「タクシーを勧めたほうがいいんじゃないですか？」とずっと聞いていたのですが、「決められていますから、とにかく並んでください、としか私は言えません」の一点張りなんです。

でも、前の方の状況次第によって、判断を変えてもよかったですと思うんです。会場内は、チケットの問題などもそうですが、なかなかボランティアが自分の判断で決定することは難しいにしても、会場外では、ボランティアに責任を持たせるという形で柔軟に対応ができたのではないのでしょうか。

逆に疑っているのは、上から、「決定された以外のことは言うな」という通達が出されていたのではないかと、ということです。そのあたりも含めてお伺いしたいのですが。

小島 私自身は新潟でのボランティアを体験していないので、報告という範囲ですが、裁量権は非常に不明確だったと思います。「絶対に言うな」とは言われていませんが、逆に「ここまで言ってもいい」という指示もなかったようです。わからないときは、いつでも携帯からボランティアセンターに連絡する体制になっているのですが、いざかけてもいつもつながらない状態でした。

手前ミソになりますが、われわれはいつもJリーグの試合のときは……観客動員数は1ヶタ少ないですが……切羽つまった状況の中で、なんとか自分の裁量でまがりなりにもやっているんですよ。

ただ今回のコンフェデレーションズカップでは、まるっきりボランティア経験がなく初めてという人の方が多く、しかも彼らは、だいたいスタジアム周りの駐車場、駐輪場に配置されていたようです。ですから小出さんが遭遇したのは、そういうボランティアであった可能性が高いです。

もしそうであるとすれば、彼らは経験がないですから、自分たちがどこまで判断できるか見当もつきませんし、しかも先ほど言ったような研修内容だったので、何も判断できず、自分たちも不安だったと思います。これはあくまでも推測ですが……。

竹原 今回はFIFAが絡みますので、管理エリア内のJAWOCボランティアとエリア外のボランティアで対応が変わると思います。もしバスに乗るのが管理エリア外だとすれば、多少の融通はききやすいと思います。

管理エリア内については、私がふだんJリーグで活動しているときに、どういう裁量権を与られているかという話が少し参考になると思います。まずは私たちが、たとえばチケットを切る役割を与えられたとします。観客が違うチケットを持ってこられた場合、まず現場のリーダーに報告します。リーダーが権限を委任されている範囲は自分で判断しますが、それを超える範囲については、必ず、先ほどから話に出ている、イベント関係のプロとされるシミズスポーツに判断を任せます。

ですから、ボランティアが自分で裁量できる範囲は、観客が過ごしやすい環境を整えることで、たとえばゴミがあふれていることや、近い入口から誘導することなどについては現場で裁量権が与えられていますが、チケットや管理セキュリティに関わるものについては、ほとんど裁量権がないと思ってください。

もしボランティアに裁量権を持たせるということであれば、近くに必ず警備員を配置していただかないと、私たちとしては活動しに

くいという気がします。

長岡 今の話で少し補足させていただくと、管理エリア内とエリア外という指摘がありましたが、コンフェデ杯に関しては、入口でチケットを切ってスタジアムに入場してからが管理エリア、その外側が管理エリア外になります。基本的には、管理エリア内については、JAWOC、地元の県サッカー協会を含めた組織でのボランティア構成であり、その外側は、開催自治体側によるボランティア構成ということになります。

私自身、新潟に関しては、ビッグスワンにすら行ったことがないので現地の様子が全くわかりません。推測で話をするのは危険ですので、一般論で話させていただきます。

先ほど竹原さんが話されたように、ボランティアの権利委譲は大変大きな問題なので、運営側と十分な話し合いが必要です。物事によっては、非常にシビアな状況になりかねませんから、ボランティアという好意で働いておられる立場の方に、後々全ての責任が降りかかる事態になるようなリスクは負わせられません。

たとえば、シミズスポーツのように、大会運営側が賃金を支払って雇用している立場であれば、権利委譲についても雇用契約の中で協議しやすいわけです。ですから、ボランティアの権利委譲については、これは組織論の問題にもなりますが、判断を仰げるリーダーをどう配置するかがキーポイントになるでしょう。またその下で働くボランティアとの間のコミュニケーションをきちんと確立した上で、業務にとりかかることが大事だと思います。

ただし、実際に鹿島で試合を経験してみると、自分でも想定できなかった事態がたくさん発生しました。そういう部分で言えば、関わった皆さんには大変申し訳なかったと感じています。しかし大事なことは、それをもう一度繰り返さないことだと思います。

スタジアム以外をどう祭り空間化するか

中塚 ボランティアに関連しても、まだまだ取り上げるべき課題はあると思いますが、もう一つ大きな課題があるので、残り時間はそちらにあてたいと思います。それは、ゲームが行われる場所だけでなく、まち全体を、どう祭り空間化していくか、ということです。

まずスポンサーの側から、ビクターのワールドカップ推進室の木村さんがいらっしゃいますので、どういったことを考えておられるのか、話せる範囲でご紹介いただきたいと思います。

木村 日本ビクターの木村です。今回総務省と一緒にあって、スポンサーとして、大画面によるバーチャルスタジアム構想を計画しています。われわれは 20 年前からスポンサーをしています、今回も

2002年の大会に向けて、3面のバーチャルスタジアム、いわゆるサブメディアセンターにおいて、ピッチ全体をシームレスに見せようということを計画しています。それが一つ。

もう一つは、チケットのないサポーターやサッカーファンの皆さんに、ベニューや大都市中心に全国20数ヶ所で、5千人か1万人収容できる施設を用意していただき、大画面で試合の様子を2000円か3000円程度で見させていただこうと思っています。

フランス大会、アメリカ大会でもそうですが、数万人収容のスタジアムと同数程度、チケットレスの人々が集まってきます。そのセキュリティの意味からも、バーチャルスタジアムの構想は生かされると思います。そこで、現在、総務省やその他の国の機関と一緒に、プロジェクターなどの機器を開発し、来年の本大会に間に合わせようとしています。

中塚 次に、後援団体でもあります、日本サポーター協会（JSA）の浅野さんから、ファンビレッジ構想についてご紹介いただきたいと思います。

浅野 日本サポーター協会の浅野と申します。端的に言えば、私たちが考えているファンビレッジ構想の内容は、先ほどの小島さんが新潟の「万代ファンビレッジ」で行われた6つのポイントとまったく同じです。

そのコンセプトには、先ほどビクターの木村さんが指摘されたセキュリティの問題が当然入っています。ただその中でも2つ大きなポイントがあります。一つは、無料であること。ここで金をとろうという気持ちはいっさいありません。もう一つは、市民がやること。公式スポンサーでも自治体でもなく、市民がやることです。この2つを大きなコンセプトにしています。

なぜかと言えば、前半はビクターの木村さんと同じですが、5万人収容のスタジアムに、10万人が来る。5万人のチケットレスの人からお金をとることは、僕としてはおかしいと思っています。アルゼンチン戦で泣いたツールーズの日本人のことを思うと、僕はお金を取る気にはなれません。

それから、なぜ市民が作るか。これに関しましては、申し訳ないのですが、企業がオフィシャルスポンサーとして関わると、イベントで終わってしまいます。これはある意味、行政も然りです。それに対して、市民が主役でやると、次のステップに行けます。これをわれわれはカッコ良く「スポーツ文化の醸成」と呼んでいます。お題目はどうでもよくて、自分たちの経験をふまえて、次のステップに行きたいと願っています。

たとえば、横浜に来たアルゼンチン人が、2年後、パティストウータのサインを持って自宅に来てくれるかもしれない。そういう交

流がどんどん広がることをイメージしています。

そのために、「無料」と「市民がやる」という2つの原則を貫こうとしています。で、現実に、そういう夢物語が通用するかどうかですが、実際、すでに10都市でやることは決定しています。もちろん費用がかかりますので、スポンサーはそれなりについていただきますが。

また、「ファンビレッジ構想」を実現するためにどういう準備をするかについても決定されていて、すでに動いています。具体的には、それぞれのベニューのスタジアム見学会、スタジアムの周辺紹介を、われわれの協力のもとに、各ベニューの市民の方にやっていただいています。それをどんどん盛り上げながら、本大会を迎えるというスタンスをとっています。

話せば長くなりますので、詳細は、ホームページを見ていただければと思います。

<http://www.jsa-npo.or.jp/>

中塚 もう1人、大学生で「SANPOツアー」を仕掛けている、「LOVE JAPAN」代表の片岡さんにも、企画の内容を紹介していただきたいと思います。

片岡 「LOVE JAPAN」の代表をしている片岡と申します。私たちは、たくさんの人々が集まり、エネルギーが発散されるワールドカップという場を通じて、何かをしたいという思いでスタートしました。

海外からのサポーターたちが、試合のない日にどうするかを考えたとき、観光するだけではなく、もっと日本の日常的な部分や庶民的な部分を見てもらいたいと考えました。こういう機会でもなければ日本に来ない人も多いはずなので、そういう人々に、もっと日本を楽しんでほしいと思ったのです。

そこで「SANPOツアー」を企画しています。今年の6月半ばから本格的に動き出したばかりなので、メンバーもまだ20名程度で、週2回程度ミーティングをして活動している状態です。現時点で拳がっているツアーとしては、銭湯、寺めぐり、回転寿し、相撲体験などで、お金がかからず、ワールドカップのノリでみんなが楽しくなり、しかも心に残るものを、と考えています。

現在は東京だけのメンバーですが、構想としては、日本10会場すべてで実施したいと思っています。またせっかく日韓共催ですから、できれば「LOVE KOREA」も作りたいと思っています。始まったばかりの活動ですが、そこまで拡大して実現してこそ、私たちの目指すものの意味があると考えます。基本的には、この運動の中心は学生ですが、幅広い皆さんのご意見も伺いたいのので、ぜひご指摘やアドバイスをお願いします。

ホームページもできたばかりで未熟ですが、掲示板などもありますので、よろしければアドバイスください。

<http://www6.ocn.ne.jp/~lovejpn/>

ワールドカップへの決意も新たに

中塚 この問題についても、たっぷり時間をとって話し合いたかったのですが、残念ながら時間になってしまいました。幸い、IT革命によって、メール等で互いにコミュニケーションはとりやすくなっているのも、もし必要であれば、皆さん同士、この話の続きをしていただきたいと思います。

最後に、今日のパネリストの方から一言ずつコメントをいただいて、総括としたいと思います。

長岡 今日は皆さんとお話しできて、良い勉強をさせていただいたと思っておりますし、ナマの声を聞かせてもらうことによって、自分たちの仕事を進めていく上で、一人よがりになってはいけないということを改めて痛感しました。

時間は限られていますが、これを機会に、皆さんからいろいろなご意見をいただいて、本当にインパクトの残るワールドカップにぜひしたいと決意を新たにしました。

竹原 本日私たちが参加させていただいて、スポーツボランティアについてもう一度考えていただけたら、と思いました。

つい最近まで、ボランティアと言えば、介護、福祉などが中心のイメージがありましたが、これからは自分が楽しむためのボランティア活動が日本にあってもいいんじゃないか、そして、それがワールドカップで実現していくのではないかと期待しています。

そのために、自分でもっと判断したい、もっと前に進みたいという思いと、責任問題との狭間での葛藤.....そういうボランティアの気持ちも、今回のシンポジウムを通して理解していただければと思いました。

小島 実は、コンフェデ杯が終わった後、相当めげてまして、Alliance2002の活動も他のメンバーに任せて、若干引きこもり状態でした。今日もあまり良い精神状態ではありませんでしたが、皆さんといろいろな話をするうちに、ちょっとまた元気が出てきました。

日本サポーター協会の浅野さんたちとは一緒に活動する体制ができてはいるわけですが、その他、「LOVE JAPAN」のように、シンプルだけど魅力がある仕掛けを考えておられる方達に出会い、エネルギーが湧いてきました。今日は元気を与えていただいて

ありがとうございました。

中塚　ここに参加された皆さん全員に、ちょっとずつ元気が与えられれば良かったと思います。「2002年に向けて」と言っているうちに、もう目の前に迫ってきています。次は、「2002年をどう次につなげていくか」というテーマも見据えていかなければなりません。そのとき、ワールドカップを契機につながったネットワークが、先々生きてくると信じています。

今回、後援していただいた Alliance2002、日本サポーター協会、ソシオ・フリエスタだけでなく、本日参加していただいた皆さまと、多少なりとも“志”を確認できたのではないかと感じられ、主催者としても大変うれしく思います。

このシンポジウムの内容とあわせて、何名かの方に特別寄稿をお願いし、それを含めた形で報告書を作成して、全国の関係機関に配布し、さらに“志”の輪を広げていきたいと思えます。

長時間にわたり、ご静聴いただき、また積極的なご意見をいただき、大変ありがとうございました。